

(大島郡知名町久志検水窪)

### 位置と環境

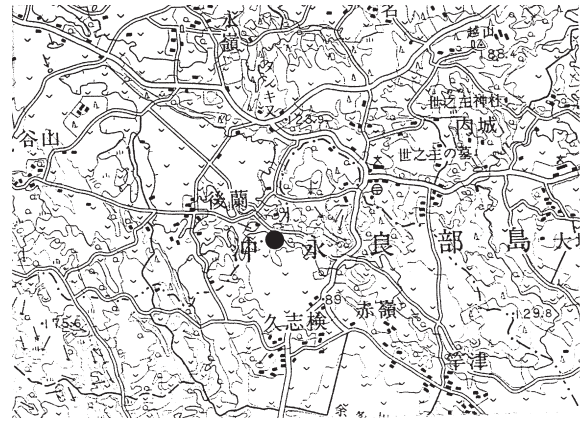
沖永良部島は徳之島と与論島の間にあり、面積94.5平方km、西部は広く、東方へ細長く伸びている。古生層を基盤にして、数段の隆起珊瑚礁からなり、西部の中央に標高245m島内最高的大山が位置している。遺跡は大山を囲んで分布するドリーネの一つ、東北部山麓、標高100mの久志検水窪にある。本遺跡は森林に覆われ、地下に水脈があつて北から南へ流れ、鐘乳洞を形成し、窪地内に2か所の鐘乳洞に通ずる洞穴が開口している。この開口部分と窪地内に遺跡が形成されている。

### 調査の経緯

和泊町史の調査に関連して、岸田善光の採集土器から、中甫洞穴に爪形文土器が出土していることを知り、河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望が、昭和57年10月5日より同11日に至る11日間、中甫洞穴の自主発掘を行った。続いて知名町教育委員会が、国・県の補助事業により、前記メンバーで、昭和58年9月1日より同14日まで、および昭和59年8月1日より同20日までの前後31日間の発掘調査を行った。この間に人骨の発見があり、松下孝幸に調査を依頼し、動物骨に付ては西中川駿・松本光春の執筆を頂いた。

### 遺構と遺物

遺構は北側洞穴入口付近および中央の洞穴、前庭部に当たる窪地、窪地の南部に開口する洞穴内部の3か所である。北側洞穴入り口の東側崖下に遺体の



第1図 中甫洞穴の位置

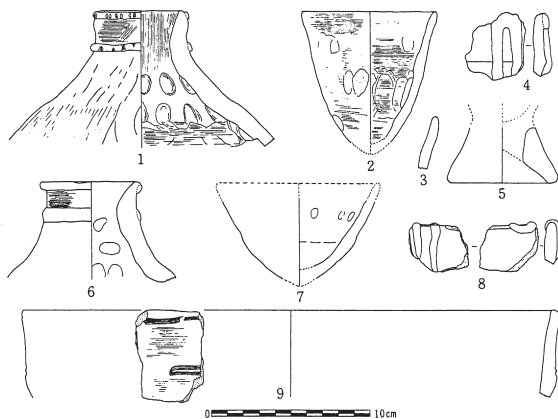
埋葬が行われた以外は、特別な施設と見られる遺構はなく、ほかは生活跡と見られる遺物包含層である。

人工遺物としては土器・石器のほかには牙・貝製品を出土した。地層は5層あり、包含状況は良好である。本遺跡の土器を、若い順に上げると、2層3層出土の土器(第2図)がある。南九州の充実した脚台と共伴しているのも、弥生中期に該当する。次に4層の土器を上げると、4層上層に、上半に篋削波状文を施した円筒形尖底土器(第3図)がある。次に4層中層には、移入された円筒形尖底の轟式土器(第4図1)が出土しており、第4層下層からは、円筒形尖底の連点波状文土器(第4図2)が出土している。この土器は縄文早期に該当する時期のものと思われる。さらに、第4層の最下部からは、爪形文土器(第5図)が出土している。この土器は笠利町岸川遺跡の爪形文土器や、沖縄県の渡具知東原遺跡の爪形文土器とは系統の異なるもので縄文草創期に当たるものと思われる。第5層は無遺物層である。

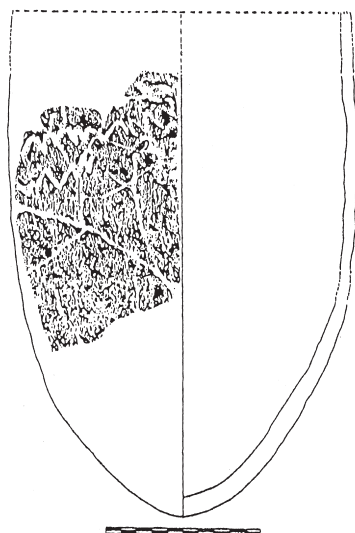
石器では、打製石器・磨製石器・磨石・叩石・石皿・砥石・剥片石器が出土している。

自然遺物では、哺乳類・イノシシ・ネズミ、鳥類・ツグミ・キジバト、魚類・クロダイが出土しているが、イノシシが主で、シカは見られない。貝類はチョウセンサザエ・シャコガイ・ハチジョウタカラ・タツマキサザエ・ヒバリガイ・アンボンクロサメ・オニコブシ・ハナマルユキ・オキニシ・ナミギセル・ハリエビス・ヌノメリスガイ・ヒメミミガイ・マイマイが2層4層から出土している。

埋葬人骨は、縄文時代人1体、弥生時代人4体で



第2図 1-2・3層出土土器



第3図 篋削波状文土器

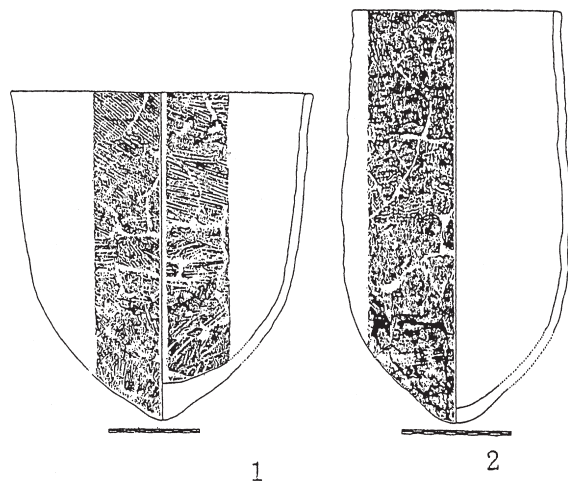
ある。また縄文時代以降と考えられるものと弥生時代以降と推定されるものが、それぞれ1体ずつ存在する。

縄文時代人骨は、女性壮年骨で、頭型は長頭型で、推定身長は147.08cm、低身長である。

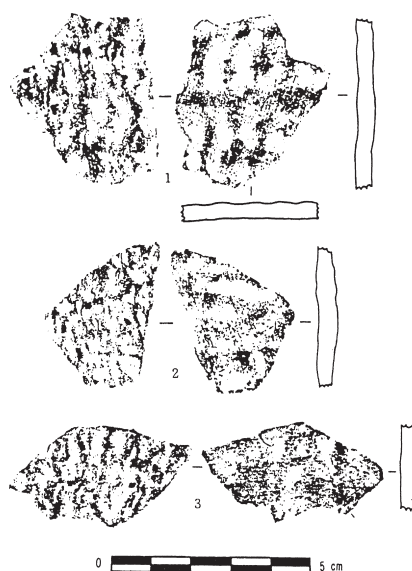
弥生時代男性の四肢骨は大きく、筋付着部の発達も良好で、上腕骨は著しく偏平で、大腿骨には柱状姓が認められる。南九州の弥生人は、諸径が小さいものと考えられてきたが、この四肢骨は諸径は大きいものであった。

#### 特徴

中甫洞穴は、内陸部の鐘乳洞を利用した先史時代の生活跡であり、縄文時代該当の時代から、弥生時代該当の時代におよび、極微量であるが歴史時代の



第4図 1 轟式土器・2 連点波状文土器



第5図 爪形文土器

痕跡も残し、また埋葬遺構もあり、従来南島に見られなかった長頭型など特徴のある人骨の出土と共に、いくつかの新型式の土器が発見され、南島の先史文化について、若干の新資料が加わったことは、本遺跡の重要性を示すものである。

#### 資料の所在

出土遺物は、知名町教育委員会に保管されている。

#### 参考文献

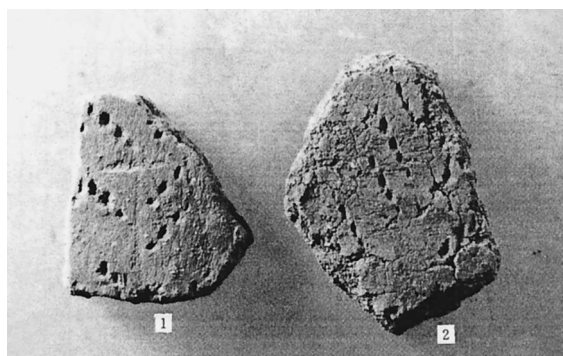


写真1 第4層下層の土器

河口貞徳・本田道輝・瀬戸口望1983「中甫洞穴」『鹿児島考古』第17号

知名町教育委員会1984「中甫洞穴（1）」『知名町埋蔵文化財発掘調査報告書』

知名町教育委員会1985「中甫洞穴（2）」『知名町埋蔵文化財発掘調査報告書』（河口貞徳）